

## 【平成 17 年度】教育に関する自己点検・評価

氏名：上原 真理子 担当科目名：生活衛生学

## 1. 授業評価について

- (1) 意義：質問項目に改善の余地あり
- (2) 活用：参考になっている
- (3) フィードバック：結果を説明した

## 2. 授業の相互評価について

- (1) 意義：緊張感と公開性と言う点で良い効果があると思う。また学生の評価だけで偏る危険を避ける意味で良い。しかし参加人数に偏りがある。
- (2) 活用：したいと思う。評価項目に長所と短所（改善点）を書くようにしたらどうか。

## 3. 自己評価点 (3.7)

根拠：＜相互評価の授業について＞内容的には、学生に伝えたい動機も十分あり、準備もしたが、初めてのことで少し緊張した。また時期的にも、まだ授業のリズムが軌道に乗る以前だったこともあり、伝えたいことが十分に伝わらなかった様に思う。ただ評価者がいることで張り合いはあったように思う。＜11回の授業全体について＞自分としては「重要なことを出来るだけ解りやすく」と心がけたが、学生にはわかりにくいところがあったようである。

## 4. 教育指導上の工夫について

身近で大事な事を知って欲しいという気持ちで、なるべく興味を引くように新聞記事などを多用した。またレポートも書かせた。しかし興味、関心、理解に向けて、レベル把握に努め、板書を丁寧にする必要がある。

## 【平成 18 年度】教育に関する自己点検・評価

氏名：上原 真理子 担当科目名：生活衛生学

## 1. 授業評価について

- (1) 意義：教員の到達目標としての意味はある。項目は内容を問うものにするべきではないか。
- (2) 活用：点数の低い項目の改善に活用する。
- (3) フィードバック：次回の授業内に結果を詳細に説明したが、それについて興味がない学生もあった。

## 2. 授業の相互評価について

- (1) 意義：他の授業を参観するのは専門を問わず有益であることがわかった。
- (2) 活用：自分の授業の改善にも役立ち、他分野の理解へと繋がる。

## 3. 自己評価点 (3)

## 4. 教育指導上の工夫について

時事問題を取り入れて興味を持たせ、実生活に役立つ内容を心がけた。新聞記事なども利用したが、今年度は多すぎないように気をつけた結果、学生にも教員にも適量に納まった。

教員自身の専門と経験を基礎に内容を膨らませて展開したが、物の見方の根本を身に着けて欲しいという意図は理解してもらえたように思う。わかりやすい説明、板書、話し方は一層の改善が必要である。今後はパソコンなどをもっと利用した

いと思う。学生に自由に記述させるアンケートは定着して一定の成果を出しているのが今後も続行したい。さらに学生との質疑応答もできればよいが、現時点ではまだ無理かと思う。今後の課題である。

## 【平成 19 年度】教育に関する自己点検・評価

氏名：上原 真理子 担当科目名：生活衛生学

## 1. 授業評価について

- (1) 意義：経年変化、クラス間の差から学生の変化と多様性が把握できるが、項目が少なすぎるので実態把握は十分でない。
- (2) 活用：自由項目で結果の分析を試みたが、余り成果はなかった。
- (3) フィードバック：2クラスに結果を示し、受講の心構えについて述べた。

## 2. 授業の相互評価について

- (1) 意義：評価の高い授業の見学を行うことは意義があると思われる。
- (2) 活用：相互評価も良いが、各コースでどのような教育が必要か、意見交換をすべきである。

## 3. 自己評価点 (3)

## 4. 教育指導上の工夫について

及第点に満たなかった者については、同じ問題のレポート提出を課した。

レポート提出後、5人を同席させ、口頭試問した。レポートに書いてあっても理解していない場合は、これによりチェックできた。少人数で話し合い、また競い合いながら考え、答えることによって、印象が深まり、興味を持たせることが出来たように思う。学生からも、「大勢に向かって話す講義より、やる気が出る」との感想があった。本来、このような形が理想であるということ、改めて実感した。講義では衛生学は社会の様々な問題と直結しているので新聞記事も多用した。これを期に新聞を読む習慣を付けて欲しいと思ったが、余り効果は無かった。しかし、「興味を持ち視野が広がった。役に立った。」との感想は多かった。

## 【平成 20 年度】教育に関する自己点検・評価

氏名：上原 真理子 担当科目名：組織学

## 1. 授業評価について

- (1) 意義：内容も対象も初めての講義だったので、学生の反応がつかめない状況で、授業評価は大いに意義があったと思う。
- (2) 活用：授業評価後に改善に少し役立ることが出来たものの、15回の終わり近くに実施された結果については、年度内での改善にほとんど反映できなかったのは残念だった。
- (3) フィードバック：結果が出次第、授業中に評価点をすべて公表した。

## 2. 自己評価点 (3.0)

## 3. 教育指導上の工夫について

従来、学生は授業を聞き板書を見ながらノートし調べ独自の工夫をして完成させるものであり、それが楽しみでもあり

学びの一步だと考えてきた。従って板書中心でパソコンは使用せず、纏めのプリントもあえて配布していなかった。また教科書は、たとえ全部終わらなくとも後で独習できるように、なるべく内容のある厚いものにしたいという方針であった。しかし、次のような経緯から方針転換の時期に来ていると思われる。

授業評価調査は独自に実施した3回と併せ計4回となったが、これは初めての試みである。1回目は感想を自由に書かせたところ、「速い」という意見が若干あったので以後、ゆっくりやるよう努めた。中ほどの回から時間が足りなくなってきたためにスピードアップした。

2回目の調査を12月上旬<教材・速度・わかりやすさ・役立ち>について独自に1から5までの評価をさせたところ4と5が多かったが、「速度」と「わかりやすさ」について数名低い点があった。組織学の教科書300ページほどを15回で終わらせるためには、どうしても速くなる。何とかしたいと思いつつも既に終盤で改善のチャンスがなかった。

その後、3回目の本来の調査では「教材、特にプリントの図が有用だった」という意見が多かったが、「進め方」「レベル把握」の評価が低かった。結果を受けて、その後の授業は、重要項目に絞ることで時間に余裕を生み、ゆっくり、わかりやすくするよう努力した。レベル把握のため小テストをしたいが時間がないというジレンマに陥っていた。代わりに質問をし、挙手を促したところ、はじめは反応が良くなかったが、後半では手が挙がるようになった。解剖学と重なる部分があるので、その都度、すでに学習しているかどうか質問しながら進めた。これについては「事前に教員間で情報交換の上、調整しておいて欲しい」との意見があった。

4回目の最後の調査は定期試験の際に、15回の講義の中で回を追っての「わかりやすさ」の変化を表現してもらった。「段々わかりやすくなった」というのは成績の良い学生で、「わかりにくくなった」という感想が残念ながら多かった。

次年度は学生のレベルに合わせて、教材も含め授業改善したいと思う。具体的には①講義内容に関する教員間の調整と意見交換 ②重点項目の選択 ③重点項目をプリント配布 ④小テストの実施 ⑤パソコンによる板書の能率化 ⑥組織標本を用いた説明等を改善点として考えている。